

絲
柳

三
編

上

~ 13
2928
7



13
2928
7

昭和九年
七月六日

いづれ柳二編序

廿の年^よに^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

病^まの^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

夫^のの^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

あ^のの^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

た^のの^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

た^のの^ま流^りて^ま園^まの^まを^ま春^ま終^る。

如^のき^の 観^の 或^の 些^の 亦^の 其^の 善^の 人^の 其^の 善^の 事^の 其^の 善^の 事^の
 不^の 題^の を 弄^の く 一^の の 心^の 一^の の 心^の 一^の の 心^の 一^の の 心^の
 其^の 母^の 抱^の き 意^の 一^の の 花^の が 傳^の へ 一^の の 看^の 官^の 可^の 命^の
 寧^の 實^の を 忘^の れ 一^の の 中^の 神^の 一^の の 哉^の

狂訓亭

為永春水誌

兩國竹枝

玉后老人

一身垂淚對花筵 空曙

玉色蟬吟蝶首圓 周小溪

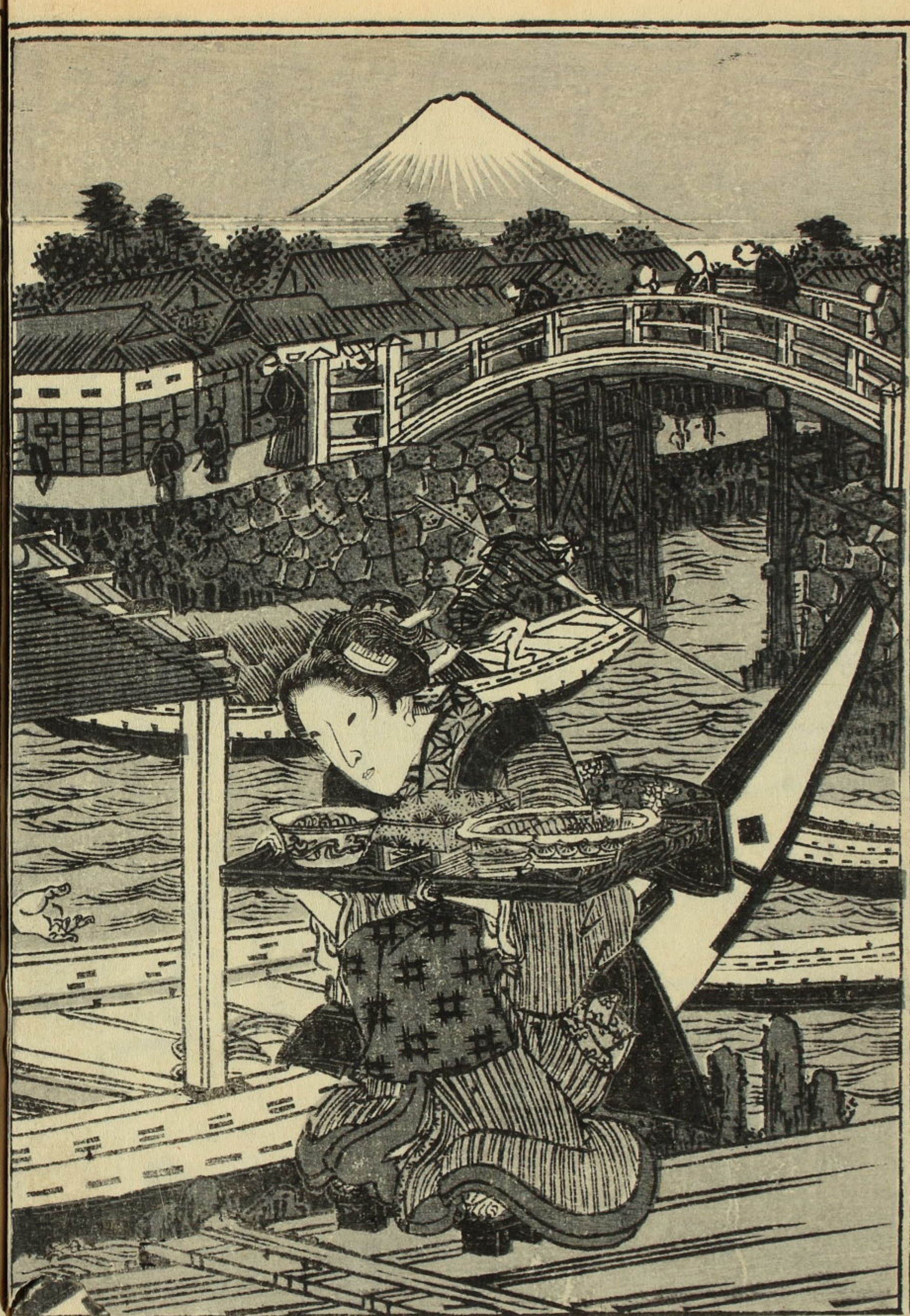
不覺春風吹酒醒 東坡

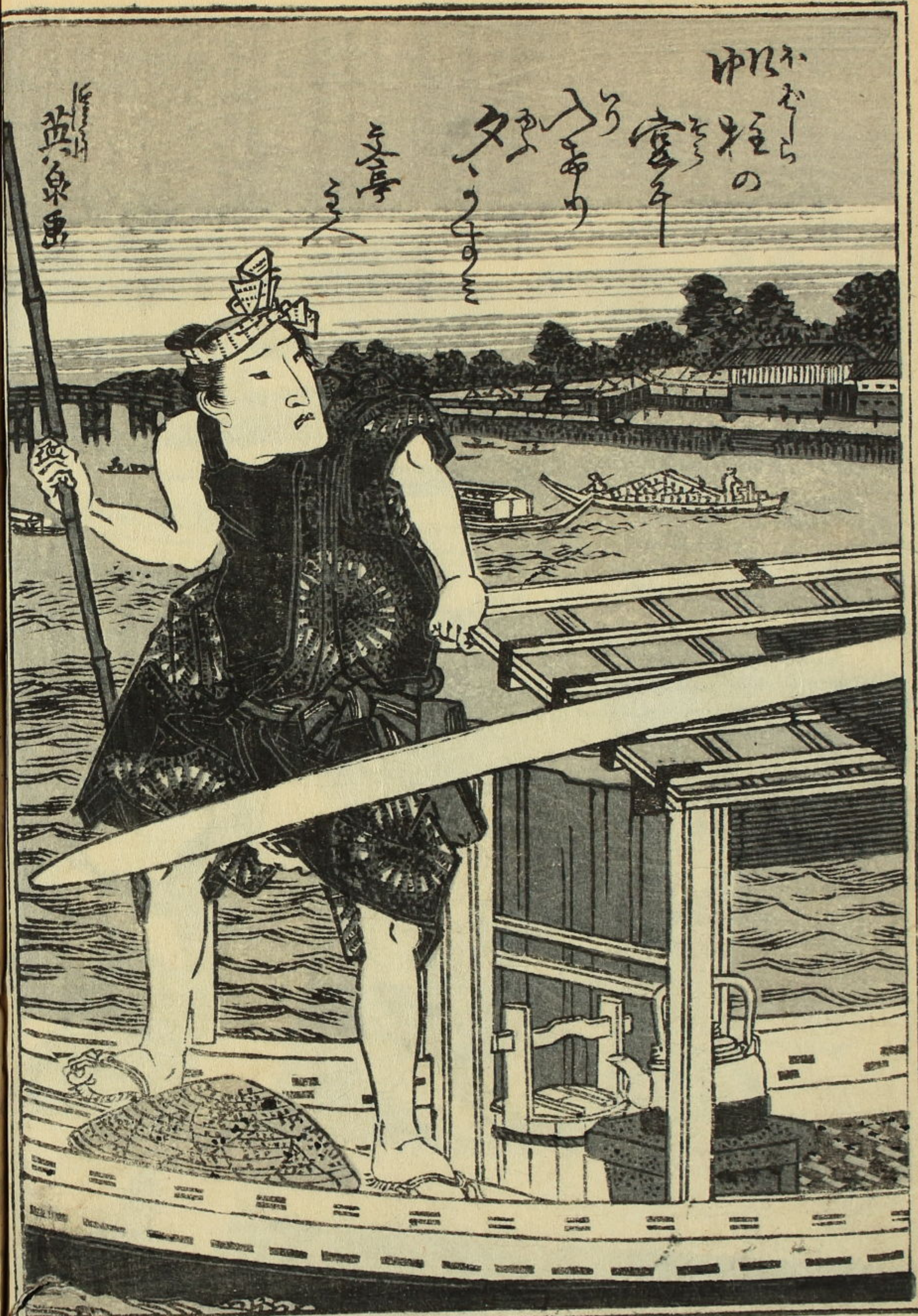
倩人杖上柳梢邊 菊山



十一年八月
 志門のさくら
 好むに
 秋の
 舟の
 漕ぎ
 へ







英泉画

三亭

おむら
の
宮
入
夕

新話 同朋房 以登家内喜卷之七

江戸

為永春水著

第十三回

あつ東の川の端邊考ふる一町あり湯の里へゆをた
 めう箕端と吸釜煮の行もをうひとたり雨の日の雲の
 ひ貝いぞ淋し丸芽が軒窓へちるうふアの窓ふあうふて
 む方塔の燈籠終びをくくはるまとのみ候るまきの廓
 おまふ初る町めり西白くと霧家ふは居酒落人あり

孤獨老女の静がぬる憂への息よが身と悲びて所にと
すおの思ひがけを死するもありやはたの情をく心は成す
てあふゆふゆふ憂の持あふらんやなほ一軒の暮れあり
澄夜を入んぬゆりのあふれれば後の方小夜ありんねの生
垣の如くあんと南と見渡らん垣成めく人もえぬ未六沖の河
より移し拙人を風成の思入垣の暮の逐様夏の夕色の
懐火をふ米橋のの表成ゆる物火くと静の小竹とも相
方の心成さるるあのかうん橋子一魂のあひもする
秋の経

を死相成看んる花が拙成暮ひむし成あの大ゆも奈り
えんやふ梅野の空霜の白き成えんも若が肌のうつくしさを
あひあをさうううくねやうぐわふうく一死あふ心のむとあ
ト一くあひんもううり香の忘らさねばとそふを奈成心
思のまうりけるもけ家のまことらへんは十才なるの如く
廊のまへ日暮るをひ家成成はる業成成ゆる計業かえ
とむじありあふらん方法業よりけ程けあふ含啼と香
あう一つ一個の息子暮齡六十二には方と成すらん自然と

おとこがたきとていふこと
 温順同様にしろむねもよくあつらふもの多し
 されど
 さうなつての癖も大抵小女好みは世に傳へて来た又若
 かり
 傍とす方とら面白きものもあると一まご肌をたか月の初
 旬もあつた
 初年の宵に多しけ見稽考のたのむ敷の事
 ドンと一アツリをたか月の初年の大
 ろど
 方難や地はぐ面白くても中が所もさうか
 見さき
 性れよ多しとやアめわく今一まご肌をたか月の初
 年
 性りつては障子の内をいせやう女の姿もよく
 見さき

えん何れも小女先着と推しよみ成すはまま一まご肌を
 性
 性小女も目ドロいんごまのまひに私をんとえん
 えん小女も目ドロいんごまのまひに私をんとえん
 のうごと二十むりまればどの災難起るや二十一才と見えり
 嫁小女杯の女の身のうへと推察するはまま一まご肌を
 まもも
 性れよ多しとやアめわく今一まご肌をたか月の初
 年
 性りつては障子の内をいせやう女の姿もよく
 見さき



依夜雁和を尋て
隠食の和の里ふるる

花言鳥語 はなごころ 女家あり にょけ 小階り こゝろ もせば もせば 色 いろ 男 おとこ の の ころ ころ 死 し 青 あお 飯 いひ 八 やち 世 よ の の 中 なか の の 常 とこ あり あり べき べき けり

あはれ 此 こゝ 所 ところ あり あり 帰 かへ り り 来 き る る 彼 か の の 色 いろ と と 比 ひ 如 ごと 中 なか の の 初 はつ 対 たい 面 めん 小 こ 亦 また 一 いつ 奇 き 珍 ちん 或 ある 悦 えき せ せ けり けり 更 さら 亦 また 捨 すて 遣 ぢ の の 者 もの 成 な 者 もの 也 なり

紅葉 こうは 情話 じやうわ せし せし や や な な き き 全 ぜん 本 ほん 六 ろく 卷 まき 則 すなは 捨 すて 遣 ぢ の の 頭 かぶ 号 ごう 也 なり

新 しん 册 さく 以 もつ 登 のぼ 家 け 内 うち 喜 よろこ 卷 まき 之 の 七 しち

